

オーガニックビレッジはまだ



浜田市農林業支援センター
センター長 岡田 浄

■島根県西部(石見地方)の中核都市

- ▶平成17年10月、1市3町1村が合併し新「浜田市」誕生
- ▶面積：約690km²（東京23区(約621km²)より広い）
- ▶人口：48,485人（令和7年1月末現在）
- ▶基幹産業は「水産業」と「農林業」
- ▶日本遺産「石見神楽」の本場



「浜田漁港」(特三漁港)



里山の田園風景



日本遺産『石見神楽』



さまざまな
企業連携



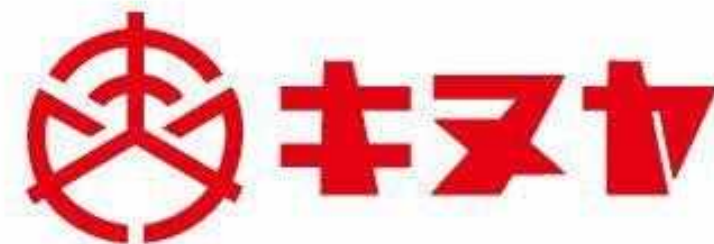
石見食品株式会社



Maruhama



市内企業
との連携



一般社団法人
奥島根弥栄



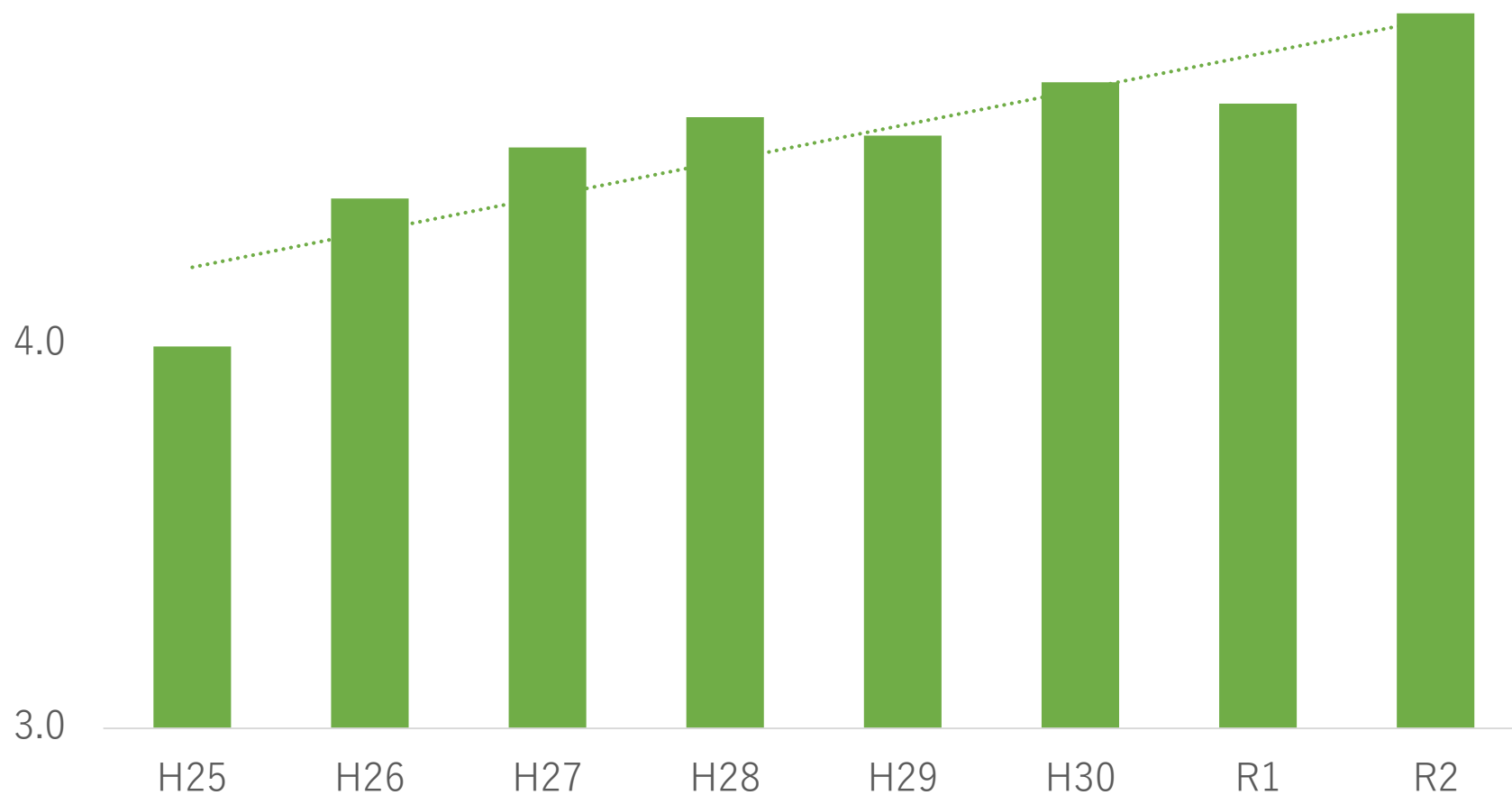
浜田市
ふるさと体験村

浜田市の状況

有機野菜の年間産出額は上昇傾向

4.8億円

(億円) 5.0



いわみ地方有機野菜の会

代表者 大畑安夫 2005年設立
会 員 14名（法人4、生産者8、関係者2）

理 念

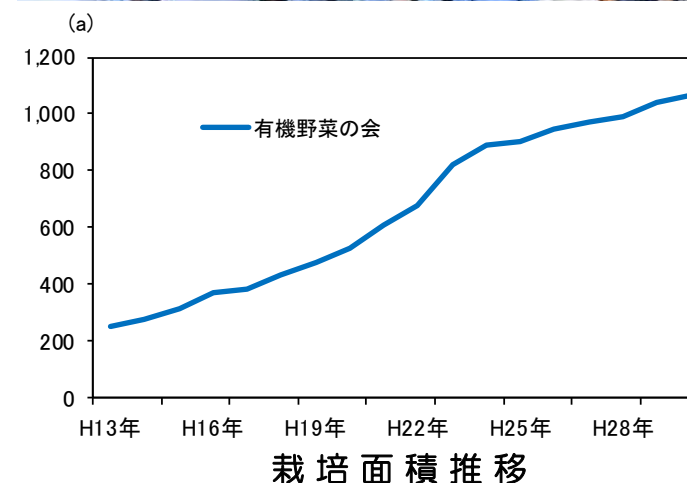
- 消費者に喜ばれ、地域に貢献する有機（エコ）野菜産地を目指す
- 環境・生態調和のとれた栽培技術と持続・継続出来る農業経営を目指す

主な取組

- 技術研鑽（技術的な情報の共有等）
- 新商品開発
- 交流活動（学校教育、消費者等）

組織概要 (2020年現在)

- 施設面積 12.0ha（ハウス棟数 440棟）
- 主力品目 ほうれん草、小松菜、水菜、葉ねぎ
春菊、ミニチンゲンサイほか
- 販売量 約800t
- 販売額 約4.8億円（取引先：約130社）



株式会社ぐり～んは～と

代表取締役 佐々木一郎
2008年4月設立 資本金210万円

目 的 いわみ地方有機野菜の会の組織的販売力強化を目的に共同出資により設立

主な業務

- 商談、受発注、代金決済
- 営農支援
(資材の共同購入、土壌分析など)



販売概要 (2020年実績)

- 売上額 約2億4千万円
- 取扱量 約400 t
- 販売エリア 県内、北海道～沖縄
- 主な取引先 こだわりや、風水プロジェクト、オルター
生協、オイシックス・ラ・大地 など



有限会社やさか共同農場

代表取締役：佐藤大輔

昭和47年から事業開始、平成元年に法人設立

理 念

■自社生産だけでなく、地元生産者等との連携・協働による有機農業の面的拡大と販路開拓を通じ、地域での有機農業の発展に寄与しつつ、安全で安心できる農産物を多くの方々にお届けする。

■有機農業を志向する新規就農者の受入れ等を通じ、地域で有機農業に取り組んでいく人材育成を行い、地域の有機農業の発展に寄与する。

事業概要

■農産物生産・販売

- ▶水稲、大豆、大麦 25.0ha
- ▶施設野菜（葉菜類） 1.0ha
- ▶露地野菜（加工トマト等） 5.0ha



■加工品製造・販売

- ▶加工品（味噌、糀、トマトジュース等）製造販売

■主要取引先

- ▶首都・関西圏の宅配業者、生協、量販店等



■令和2年度 浜田市の振興作物に「有機野菜」を追加

■令和3年度 「有機米の産地づくり」

井関農機株式会社、島根県、浜田市との連携協定締結

■令和4年度 「有機野菜の産地づくり」

楽天農業株式会社、島根県、JA、石見9市町との連携協定締結

■令和5年度 島根県初となる「オーガニックビレッジ宣言」

いかしあうつながり（有機的な関係性）によって 浜田市の大地と海、風土をはぐくみ続けるまち





農地を守ることが地域を守ることにつながり、市全体の環境保全につながる。
有機農業により浜田市の豊かな自然環境（山、農地、川、海）を次世代につなぐ。

地域連携

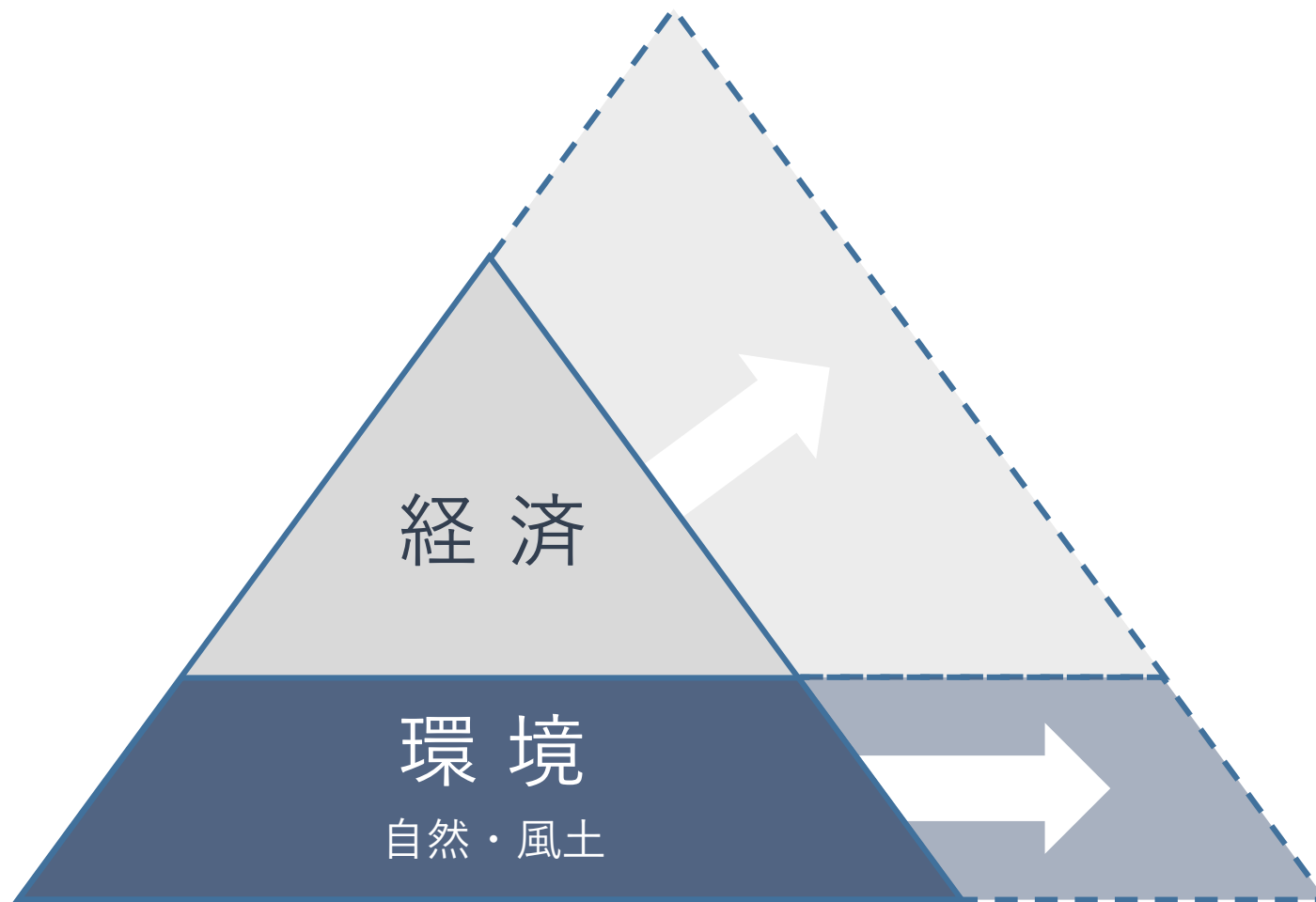
生き物調査・粃殻燻炭・学校給食
オーガニック弁当・マルシェ
オーガニックメニューの開発

食育・環境・地域の意識醸成

企業連携

効率化・省力化・価値化

有機農産物の生産拡大



環境としての価値が増えることにより
経済活動（農業）も拡大していく

求められる地域へ

井関農機(株) × 島根県 × 浜田市包括的連携協定の締結

令和4年2月、持続可能な発展のための有機米の産地づくりに向けた連携協定を締結
アイガモロボを活用した除草作業の省力化を進め、有機水稻の面積拡大を目指す。



連携協定締結式の様子



アイガモロボによる雑草対策の実証（令和4年度～）
令和6年度は、安価版アイガモロボの実証を実施

R4：4俵/10a

R5：4.5俵/10a

R6：9.5俵/10a 新型
(坪刈り収量)

目標：2回代かき × アイガモロボ
10俵/10a

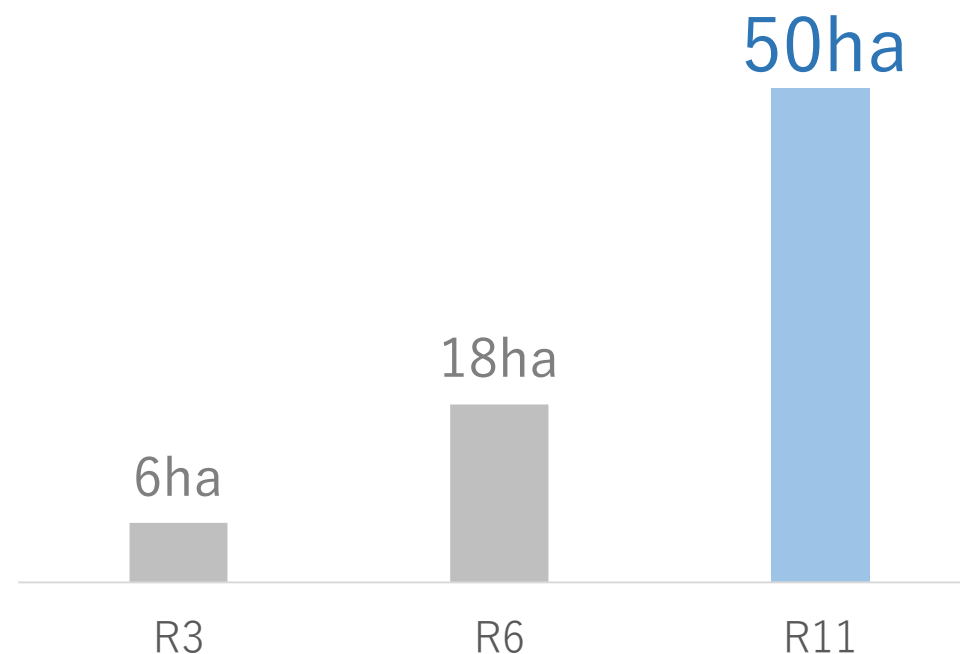
NPO法人民間稲作研究所による有機米栽培研修会の実施

省力・低コスト有機稲作の栽培方法を学び、有機米の収益性向上に繋げる。



雑草を抑える2回代かきの実習

有機米栽培面積（非JASを含む）



R6実証で7.5俵/10a

浜田市での有機米栽培体系の確立

生産者も5名から20名へ拡大

有機ニンジンの作業機械化による生産拡大

人口減少に伴う労働力不足解消のため、自動操舵機械導入し作業効率が大幅にアップ。
生産されたニンジンは、地元の学校給食にも提供。



畝立て



播種



除草



収穫

R4生産面積 20a



R7目標 1ha



R11目標 3ha

粃殻燻炭の活用による地域内循環の仕組みづくり

水稻農家が処分に困る粃殻を燻炭にして、土壌改良資材や有機米の育苗培土として活用。
また、Jクレジットの販売やクルベジ野菜の販売を通じて生産者の所得向上につなげる。



粃殻燻炭製造機



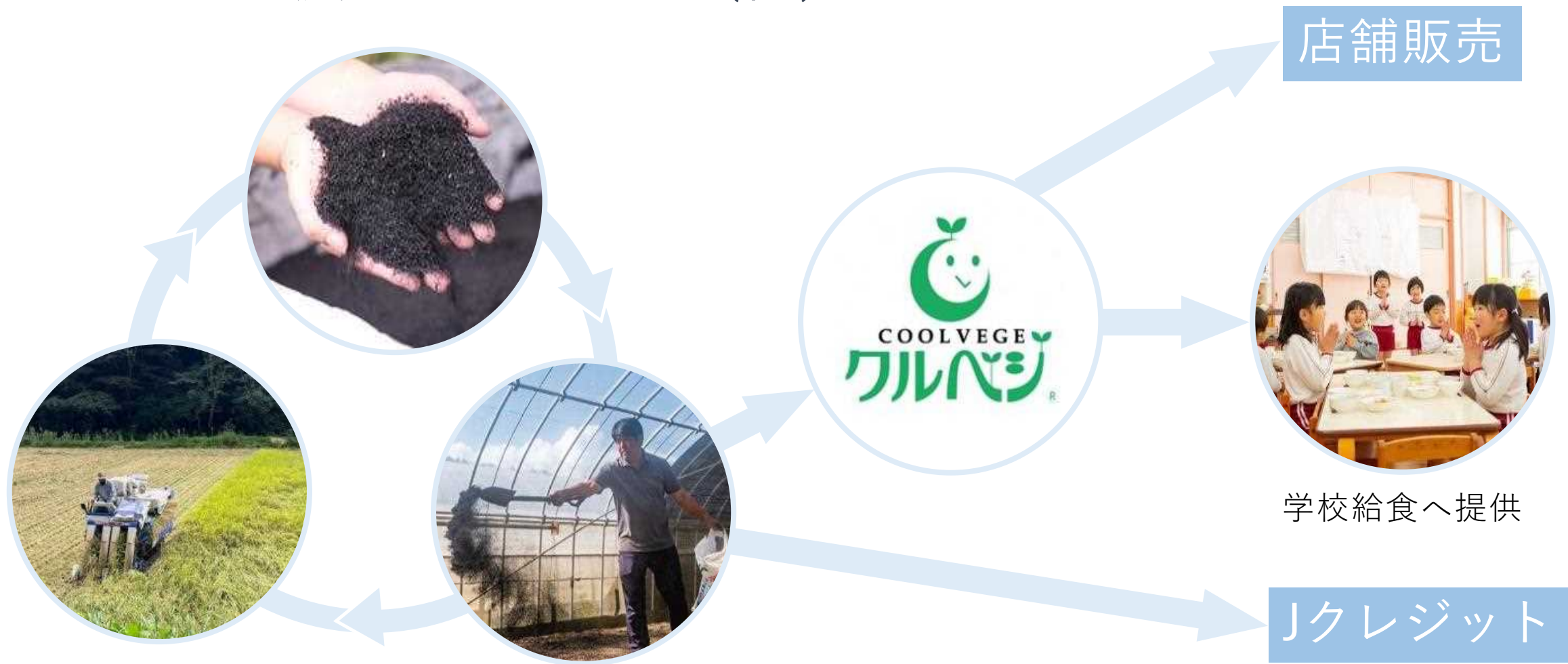
粃殻燻炭

R6 効果検証
(有機水稻・有機人参)



R7 地域内循環の仕組みづくり
(土壌改良による収益増で農家
所得向上)
(副産物としてJクレジット)

はまだバイオ炭プロジェクト（仮）



粃殻燻炭による土づくり

「みえるらべる」給食の実施

籾殻燻炭を施用した畑で育てた有機人参を学校給食に提供。
地元小学校で農林水産省職員による「みえるらべる」授業を実施し、環境意識を高める。



12/6「みえるらべる」授業の様子



「みえるらべる」を取得した有機人参

アイガモロボプログラミング（総合的学習）の実施

「プログラミングで農業に貢献する。」
農業との新しい関わり方をアイガモロボを通じて学んでもらい、未来の人材育成を図る。



アイガモロボ開発者による授業



田んぼでロボを走らせる小学生

農研機構と有機田んぼの生き物調査の実施

▶子どもの学習を通じて、大人（親・生産者）の環境意識を高め、市全体の意識醸成に繋げる。



虫取り網で生き物を採取



生き物を確認する小学生

R6：モデル実施（弥栄）

R7：他地域へ横展開

目標：市全域での実施

生物多様性を見える化し、農産物の付加価値に

▶田んぼの生物多様性を数値化し、農産物の付加価値としてアピールし消費行動の変化を促す。



生物多様性マーク

ランク	評価
S	非常に高い
A	高い
B	やや低い
C	低い

弥栄
Sランク



希少な「イワミサンショウウオ」

R6：見える化

R6：環境負荷低減の取り組み
として「みえるらべる」

R7:30by30・ネイチャーポジティブ
の実現に向けた「自然共生サイト」

5年後に目指す目標

	現状（R6）		目標（R11）
■有機面積	56ha	▶	132 ha
■有機米の販売数量	52,000kg	▶	255,000 kg
■有機米生産者	15人	▶	26 人

※各目標は、有機JAS以外の有機的管理に係る数値を含む。

地域おこし協力隊による「有機農業研修生制度」の構築

- ▶有機農業での自営就農を目指す方に特化した浜田市独自の研修制度をスタート。
- ▶研修中に認定新規就農者となり、研修終了後には機械設備や農地を確保した状態で就農が可能。



経験豊富な農家の下で
3年間の研修

R7：2人



アグリイノベーション大学校
での経営スキルの習得

R8：3人（延べ）



研修期間中に機械施設の
取得準備が可能

R11：15人（延べ）



「日本一の過疎」から「日本一にぎやかな過疎」へ